



①紅花屏風「左」(北前船・京都紅花問屋 取引の様子)



②紅花屏風「右」(春の種まき・花摘み・紅餅ができるまでの作業工程)

6 「紅花屏風絵」を読む

江戸時代

紅花で栄える 商人町山形

江戸初期から栽培された最上山形の紅花は京西陣の染織物に歓迎されました。

上の絵は、最上山形の特産物であった紅花の生産のありさまを描き、その取引、運送に至るまでを一双の屏風にまとめたものです。屏風の右隻には、春の農家の庭先に始まり、花摘み、花団子干しまでの作業の様子が描かれ、左隻には問屋の荷造り、船の敦賀港入り、京都紅花堂の店先までが描かれています。

まず、右隻の一番右端の絵は、農家ののどかな庭先の風景で紅花の豊作を祈る意味が込められていると考えられます。次に、満開の桜のもとで、農夫が出て、それぞれ**整地や種まきの作業**をしています。畦の近くには、一休み中の女が幼児を抱いて乳を飲ませており、若い娘がかいがいしく、立ち回っています。川の上流はるか遠方の畑では、**花摘み**乙女たちの笠が朝日に映えて美しく散らばっています。

屏風絵はいよいよ佳境に入り、右隻の左端は**花餅製造**の場面を描いています。老若男女およそ20数名が、それぞれの持ち場を使って、いきいきと働いています。花餅を製造するには大量の水や広大な設備が必要であり、山形市内の大規模紅花問屋が、昔、七日町近くを流れていた馬見ヶ崎川の側に場を構えて花餅を作っていたようです。

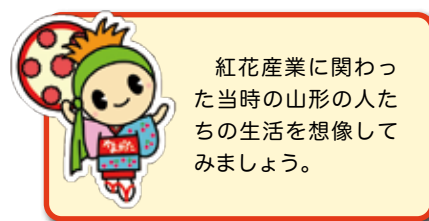


①紅餅

②紅花畑



③紅花染め



紅花産業に関わった当時の山形の人たちの生活を想像してみましょう。

左隻の屏風絵を見ると、まず、紅花問屋の庭の広場で、大人の男たちが、**花餅発送のための荷造り**を行っています。かっぶくのいい旦那が、縁側に腰掛け仕事の指示をしています。この花餅は大石田まで陸送しそこから最上川を舟で下り、酒田港で大船に積み替え、敦賀に入り京都へ輸送されました。屏風絵中央には、屋号を印した**紅花問屋の舟**が見えます。

船の荷は敦賀の荷問屋の手を通じて、馬の背に移り、三国山脈を越して、琵琶湖の北岸に運ばれ、塩津や大津を通過して**京都の紅花問屋**に向かいます。大津から運ばれてきた荷物は、車や馬からおろされ、店頭の左右に積みまっています。店は下座敷と二階座敷があり、多くの人が集まって商談が行われ、商談が成立して代金が入ると、大阪方面に出向き、衣料、砂糖や塩、上方産の雑貨類などを仕入れて敦賀から酒田へ、そして、最上川を上って山形に戻りました。

伝わる京都・江戸文化

山形は、最上川舟運による商人町、出羽三山信仰の隆盛に伴う参拝者の宿場町として賑わってきました。そのことにより、京都や大阪、江戸との交流が生まれ、独自の文化が育まれました。その一つが「蔵文化」であり、蔵座敷は京都から、店蔵は江戸から伝わったと考えられます。また、近江商人は山形に定着し上方文化を伝え、紅花商人は京都から時代雛などを持ち帰りました。



④江戸文化が見える「蔵」



⑤上方文化が見える「享保雛」

三二知識 8

おみ漬は「近江漬け」

「おみ漬」は、近江漬けがなまったもので、近江商人（滋賀県大津）が、山形の地で考え出した漬物と伝えられています。

当時、山形の人たちは、青菜の葉先を切り捨てたのを、近江商人は「もったいない！」と考え、近江漬けを作りました。

